

Analecta Anglica

松 村 恒

XII. — Hearniana : 「青柳のはなし」に用いられた漢詩

小泉八雲の「青柳のはなし」は名作『怪談』中に収められている一話であるが¹、友忠という若い侍と柳の木の精である美しい娘の物語である。能登から京へ使者として赴く途上、友忠が山中で一夜の宿を請うたことが機縁になり、老人夫婦の娘青柳を妻として貰い受ける。京にてその妻の美貌は細川の若殿の知るところとなり、青柳は細川の庭内に連れ去られる。思い止み難く、友忠は漢詩に胸の内を託して庭内に文を届ける。その文は細川侯の目に触れることとなったが、却って侯は感動し、青柳を友忠に返すばかりか、祝言の席まで設けてやった。〔物語は更に続くが、梗概は略す。〕

-
- 1 [Ed.] "The Story of Aoyagi," *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things in Writings of LH*, 11 (Boston: Houghton Mifflin, 1922; rpt. Kyoto: Rinsen, 1973), 232-244. 英文の引用はこの版による。[Tr.] 田部隆次訳：『小泉八雲全集』7 (東京：第一書房, 1926), 261-274; 『小泉八雲集 ラーフエル・ケーベル集 野口米次郎集』 (=現代日本文学集57) (東京：改造社, 1931), 72-77; 『日本の怪談』 (=小泉八雲新輯 I) (東京：大日本雄辯會講談社, 1946), 177-192; 『小泉八雲集』上 (=新潮文庫2003A) (東京：新潮社, 1950), 197-208. 平井呈一訳：『怪談——不思議なことの物語と研究——』 (=岩波文庫2513-2514) (東京：岩波, 1940; rev. 1965), 96-110; 『小泉八雲全集』8 (東京：みすず書房, 1954), 110-123; 『小泉八雲作品集』 (東京：筑摩, 1954), 『全訳小泉八雲作品集』10 (東京：恒文社, 1964), 257-270; 『怪談』 (=ジュニア版日本文学名作選13) (東京：偕成社, 1965), 79-94; 『怪談・骨董他』 (東京：恒文社, 1975), 257-270; 『怪談』 (=日本の文学15) (東京：金の星社, 1976), 96-110. 萩田庄五郎訳：『怪談』 (東京：開文社, 1950), 140-165. 田代三千穂訳：『怪談・奇談』 (=角川文庫1398) (東京：角川, 1956), 77-88. 萩原恭平訳：『怪談』 (=研究社新英文訳注叢書11) (東京：研究社, 1957), 132-157. 山本和夫訳：『小泉八雲集』 (=新日本少年少女文学全集3) (東京：ポプラ社, 1964), 60-70; 『怪談』 (=アイドル・

友忠が送った漢詩については、八雲はその訓読文をローマ字で与え、その直後に括弧で包んで、英文にて意味を与えている。本話の材源となったものは知られていて、初期の訳者である田部氏以来（最初の訳については後述）すべての日本語訳者たちはローマ字による訓読文のところを漢文に復して記している。材源として知られているのは、宝永元年（1704）刊行の辻堂兆風『玉すだれ』巻三「柳情靈妖」であり、これへの参照なくしては、復文はまず不可能である。八雲もしくはセツ夫人が実際に用いたコピーは富山大学のヘルン文庫に収められており、近年それに基づいた厳密な翻刻が布村弘氏の努力により公刊され、材源研究に多大な便宜を提供している²。その翻刻によると、問題の漢詩は次の通りである。

こうしわうそんおふこうちんを りよくしゆたれなミだを [したつ]らきんを
 公子王孫逐_レ後塵_一 緑珠垂_レ涙滴_一羅巾_一

こうもんひとたひいりてふかきことことしうみの よりこれせうらうこれろしん
 候門一入深如_レ海 従_レ是蕭郎是路人

ブックス39) (東京：ポプラ社, 1976), 67-80. 太田三郎訳：『外國人文學集』(=日本現代文學全集15) (東京：講談社, 1969), 289-293. 繁尾久訳：『怪談他四編』(=旺文社文庫521-1) (東京：旺文社, 1972), 75-86. 上田和夫訳：『小泉八雲集』(=新潮文庫こ-1-1) (東京：新潮社, 1975), 192-203. 奥田裕子訳：『怪談・奇談』(=新学社文庫) (東京：新学社, 1974), 64-78; 『小泉八雲作品集』3 (東京：河出書房新社, 1977), 43-54; 『怪談奇談集』上 (=河出文庫) (東京：河出, 1983). 津田正夫訳：『日本の怪しい話ふしぎな話』(=Meiji Books36) (東京：明治図書, 1979), 144-161. 平川祐弘訳：『怪談・奇談』(=講談社学術文庫930) (東京：講談社, 1990), 86-99. 池田雅之訳：『おとぎの国の妖精たち：小泉八雲・怪談集』(=現代教養文庫1580) (東京：社会思想社, 1995), 228-241. *Kwaidan: Seltsame Geschichten und Studien Aus Japan* (= Einzig autorisierte Übersetzung aus dem englischen v. Berta Franzos) (Frankfurt am Main: Literarische Anstalt Rütten & Loening, 1922), 91-105. 藤以魯主編『食人鬼』(=文聲階梯精釋英文17) (臺北：文聲出版社, 1989), 42-67.

2 平川訳392-396所収。

この詩に対する八雲の読み下しと英文は次の通りである。

Kōshi ōson gojin wo ou;
Ryokuju namida wo tarété rakin wo hitataru;
Komon hitotabi irité fukaki koto umi no gotoshi;
Koré yori shorō koré rojin.

[Closely, closely the youthful prince now follows after the gem-bright
maid;—

The tears of the fair one, falling, have moistened all her robes.

But the august lord, having once become enamoured of her — the depth of his
longing is like the depth of the sea.

Therefore it is only I that am left forlorn — only I that am left to wander
alone.]

もとより漢詩の英訳解説などを意図しているものではないので、英文は読み下しに対して逐次的な対応を示すものではない³。この箇所には原注があり⁴、そこで八雲自身が概括的で凡庸な英訳であることを断わっている。それより不思議なことは、諸訳の掲げる漢字復文が完全に一致してはいないことである。またそれぞれの訳者が意図している読み下しも千差万別であり、しかも八雲自身が掲げているローマ字と完全に一致するものは一つもない⁵。一句目最後の語である「後塵」に対して「后塵」と書くものが多数ある⁶。そしていずれの場合にもこの語のルビとして、

3 友忠と青柳が交す和歌に対する英文も相当に自由なものである。

4 日本で出版されている『怪談』の英文本にあっては原注が省略されている場合が殆どであるから、研究にあたっては注意を要する。

5 アメリカでの日本語の印刷にあっては、校正が充分に行き届かなかったであろうから、付加符号マクロンの有無は単に技術的な誤りとして、考慮に入れない。

6 「後塵」とするのは、田代、萩原、山本、津田、平川、池田である。広瀬朝光「小泉八雲『怪談』の研究」(三)『島大國文』5 (1976) = 『小泉八雲論 研究と資料』 (= 笠間叢書69) (東京：笠間書院, 1976), 80-97にも『玉すだれ』からの文が引かれてい

八雲自身の gojin に反して「こうじん」とするものが多い。その他はルビなしで、「ごじん」と振るものはない⁷。二句目第五字「滴」に対する八雲の読み hitataru は一見すると shitataru の誤植と思われるかもしれないが、八雲にこの詩を読んであげた人（例えばセツ夫人?）の発音を反映しているのかもしれない⁸。翻刻でもルビは枠で囲まれていることより、この箇所は破れているかして読めなくなっている様である。従って諸訳者は思い思いの読みを与えている：「うるおす」（平井、上田、繁尾、津田）「したたらす」（奥田）「したたる」（山本、平川、池田）。なお二句目の最後の「巾」を平井⁹、太田は「中」とし、山本は「布」とするが、共に押韻をも壊す誤りである。三句目最初の「候門」に対してはすべてが「侯門」とあるが、これは翻刻の方に誤植の可能性もある。その次も「入る深きこと」（平井、繁尾、上田、津田）「入れば深きこと」（奥田）といった具合に、原拠と一致している八雲の訓読とわざわざ異なる読み方がなされているものがある。

るが、そこでは「后塵」となっている。広瀬氏は底本について何も記すところがないが、富山大学ヘルン文庫のものとは異なる読みを伝える異本に基づいたのであろう。田部氏らは恐らくはこちらの本を参照したのであろう。実際には多くの訳者は原拠にあたることなく田部氏のものを踏襲したと想像される。一方平川氏を別として、「後塵」の読みを伝える訳者達はどこからその読みを得たのであろうか。ヘルン文庫のものか、或いはそれと同本のものを見たのであろうか。

『玉すだれ』には複数の版があることが、『補訂版 国書総目録』5（東京：岩波、1990）、575-576に報告されている。(1)宝永元年版：これは初版本であるが、唯一知られる香川大所蔵本は、もともとの七巻七冊のうち、巻五の一冊のみの零本である。(2)明和元年版：早稲田大のものだけが、記載されている。(3)刊行年不明：国会図書館、東洋大（六冊）、富山大ヘルン文庫（六冊）、日比谷図書館、岩瀬文庫、お茶の水図書館（六冊）。ここに列挙されているものが、同一の版が否かは、目録の記載だけではわからない。ただし、布村氏がヘルン文庫所蔵の『玉すだれ』から翻刻したものの本文と、広瀬氏が与える翻刻（底本未詳）には異なりがあるから、版によって本文が同一ではなかったことが予想される。それでは広瀬氏が翻刻の底本として用いたのはいずれの版であったのか。この問題について広瀬氏自身に問い合わせの手紙を差し上げたのであるが、奥様からの御返書によると、現在御入院加療中とのこと。一日も早い御回復を願ってやまない。

いずれにせよ、上に列挙してある諸版を実見して比較検討することにより、諸訳の漢詩の復文が『玉すだれ』のいずれの版に対応しているのか、確定できるのであるが、今はそこまで力が及ばなかった。今後の課題である。

次にこの漢詩の意味であるが、八雲の英文について云々する前に、この漢詩を漢文としてどう読むかという問題がある。それにはこの漢詩の与えられているコンテキスト、すなわち更なる出典を知らねばならない。

それではこの漢詩の出典はということであるが、田部訳の注に「唐の詩人崔郊の名高い詩。崔郊は一旦奪はれた愛人をこの詩によってとりもどすことができた」とある。惜しいことに「名高い」とあるばかりで、具体的な出典名は記してない。田部氏は知っていたのかもしれないのに、残念なことであった。上田訳の注「唐の詩人崔郊の七言絶句（七字四句）。崔郊はこの詩によって奪われた恋人をとりもどした」というのは、田部注を単に継承したものであろう。これ以外に、漢詩の出典について述べてある翻訳はない。しかも田部氏は「名高い」と言うが、崔郊という詩人は必ずしも有名ではない（勿論〈有名〉の基準は人によって大いに違うであろうけれども）。唐詩選や唐詩三百首に登場するほどにはポピュラーな詩人ではなかったようだ。だから田部氏はもう少し詳しく注をつけておくべきであった¹⁰。

唐詩を集めたものを調べることにより、次に見い出すことができた。

7 唯一例外をなす平川氏の「ごうちん」は翻刻の「こうちん」に濁点を付けたものである。

8 この問題について、国立国語研究所の三井はるみ氏から懇切な御教示を頂いた。それによると、松江の方言では共通語の「シ」が規則的に「ヒ」のように発音されることはないという。そうではなく「シ」は「ス」との区別がなく、例えば「寿司」も「煤」も [s̥i̥si̥] と発音されるとのこと。従って「ひたたる」と八雲に読んで聞かせたのが、セツ夫人である可能性は薄いといえる。

それでは共通語の「ヒ」を「シ」と発音するのはどの地域かということであるが、愛知県・長野県以西の、九州にいたる西日本各地に広く見られる。ただし出雲とそれを含む山陰地方にはこの現象は見られない。また共通語の「ヒ」を「シ」と発音すると言っても、一般的にそうなのか、またいくつか特定の単語にだけ限られてそうなのか、という問題もある。三井氏は「したたる」を「ヒタタル」と言う例として、高知県、和歌山県を御指摘下さり、同様の例は追加が可能であるとして、種々の参考文献をも御指示下さった。

今回は「ひたたる」の起源を特定することはできなかったが、今後八雲の日本語表記の問題を考えてゆく上での、ひとつの方向が示されたかとも思う。

9 平井1975では「巾」に改められている。

10 出典を探す試みが皆無であったわけではない。例えば、中西芳絵「小泉八雲「青柳のはなし」——『怪談』論（その三）——」『名古屋自由学院短期大学研究紀要』16（1984），

『雲谿友議』卷上

[Ed.] 『文淵閣四庫全書』子部三四一（小説家類）、八裏一九裏＝景印本（臺灣商務印書館，s.d.），1035.569上一下。『百部叢書集成 稗海 雲溪友議』（一）卷一 七裏一八表。

『唐詩紀事』卷五十六

[Ed.] 『文淵閣四庫全書』集部四一八（詩文評類）、五表一裏＝景印本（台湾商務印書館，s.d.），1479.835下。

これらに伝えられているかたちでは、

公子王孫逐後塵 綠珠垂淚滴羅巾 gōngzǐwángsūnzhúhòuchén lǜzhūchuílèidīluójīn
侯門一入深如海 從此蕭郎是路人 hóuményīrùshēnrúhǎi cóngcǐxiāolángshìlùrén

「後塵」という読みは、富山大学所蔵『玉すだれ』と一致している。四句目の第二字は「是」の代わりに「此」となっているが、いずれも上声であるので平仄の点からはどちらも可能であるが、第五字が「是」であるから、漢文原詩の方がよい。恐らくは『玉すだれ』の筆者の写し間違いであろう。

さて次にこの漢詩の意味であるが、八雲自身も “an effective literal translation would require some scholarship” と言っている様に、必ずしも容易ではない問題が横たわっている¹¹。上に挙げた二つの文献のうち、前者にはこの詩が詠まれるに到った背景も物語が詳しく伝えられているので（後者のそれは前者を縮小引用したものに過ぎない）、先ずは関係箇所を複写し、続いて現代語訳を与えておこう¹²。

33-41 = 『国文学年次別論文集』近代4, 1984, 348-352の註6には次に様に記してある：「名古屋大学の杉山寛行氏の御教示によれば、この崔郊の詩についての誇示は、恐らく『雲谿友議』（sic! 雲が正しい）三卷附『校勘記』一卷が出典であるが、『唐詩紀事』（sic）八十一巻にもみえるとのことである」とある。しかし中西氏は問題の漢詩の出現箇所を特定していないので、恐らくはこのふたつの漢籍を実際には繙いてはいないであろう。しかも氏は「后塵」という表記をしている。三十三間堂の棟木伝説に逸言及した好論であるだけに、画龍点睛を欠いた感を残したのは惜しまれる。

11 「青柳のはなし」には、他に澤井亜希子「LH The Story of Aoyagi——永遠に女性的なるものの愛——」『実践英文学』41（1992），157-170という研究もあるが、心理的な面に視点を置いたもので、出典研究には直接関係を持たない。

12 この漢詩について京都府立大学の榊井幹生先生が同じ大学で漢文学を講じていらっ

崔郊秀才者寓居於漢上蘊積文藝而物產罄懸無何
 與姑婢通每有阮咸之從其婢端麗鏡彼音律之能漢
 南之最也姑貧鬻婢於連帥連帥愛之以類無雙無雙
即婢
太保愛妾至
今圖畫觀之給錢四十萬籠眇彌深郊思慕無已即強
 親府署願一見焉其婢因寒食來從事家值郊立於柳
 陰馬上連泣誓若山河崔生贈之以詩曰公子王孫逐
 後塵綠珠垂淚滴羅巾侯門一入深如海從此蕭郎是
 路人或有嫉郊者寫其詩于座帥親詩令名崔生左右
 欽定四庫全書
 卷上
 九
 皆莫之測郊則憂悔而已無處潛遁也及見郊握手曰
 侯門一入深如海從此蕭郎是路人便是公製作也四
 百千小哉何靳一書不早相示遂命婢同歸至於幃幌
 奩匣悉為增飾之

又有

しやる松村昂先生に問い合わせをなされたところ、ただちに回答の書信を頂いたとのこと。榊井先生は筆者が「青柳のはなし」について執筆する際に参考にするようにとその書簡（1997.4.7付）のコピーを下された。両先生に甚深の謝意を表しつつ、大いに利用させて頂いたことを明記しておく。

問題の漢詩が崔郊のものであることは、田部隆次氏が訳注に指摘して以来知られていることではあったが、出典の指摘はなかった。中西芳絵氏は御自分の論文の註にて出典となる漢籍名をふたつ挙げておられるが、漢詩の出現箇所を指示してはおらず、また漢文原拠でのこの詩の使われ方の解説もない（cf.n.10）。従って今日に到るまで原漢文の意味を探り、『玉すだれ』での活用を比較し、「青柳のはなし」での八雲の与える漢詩の英文解説の乖離を検討したものは、無かったと言っていいであろう。従ってこの文献の解説は重要である。

松村昂書簡を引いておこう。「この詩は一種の歌物語の中の詩で、唐詩選、三體詩といった選集に見えるものではありません。原典は晩唐の范攄（はんちよ、唐の僖宗〔在位873-888〕頃の人）の筆記小説『雲谿友議』巻上「襄陽傑」にあります。『雲谿友議』には『雲溪友議』という表記上のヴァリエントがあるが、これは范攄の号である（五）雲谿／溪（人）のヴァリエントに由来している。松村昂先生は有難いことに関係箇所の書き下しを添えて下された。そればかりか難語には、括弧内に語釈を与えて下さっている。原文は四庫全書本から複写し、筆者の現代語訳は松村昂訳に大いに依っている（下線は『唐詩紀事』巻五十六に使われた箇所を示す）。

また崔郊という秀才がいて、漢水のほとりに住んでいた。文学に対する知識は相当のものであったが、財産の方は極めて乏しかった。ほどなくしてお婆の女中と関係を持つといった、阮咸がいつもしていた様な¹³放縦な行動をしていた。その女中は器量良しで、音楽の才能にも恵まれており、漢水南部地方では最も勝れていた。お婆は貧乏だったので、女中を地方長官に献上した。長官はこの女を可愛がって、無雙の様に処遇した（割注：無雙とは薛太保が愛でていた愛妾であって、今日に到るまで絵によく描かれている）。四十万¹⁴金をお婆に支払って、女中を寵愛するさまは益々深くなっていった。

崔郊は女への思いを断ち切ることができなかった。そこで敢えて庁舎の近くまで出向いて行って、一目でいいから会いたいと望んだ。女中は寒食という季節行事¹⁵のために（お婆の？）家にやって来て、仕事についていた。崔郊に会うと、柳の木の陰に立って、馬上にて涙を流して、山河の様な大きな誓いを立てた。崔郊は言葉を詩に託して女に贈った。

プリンスがそなたの後を追いかけると、

緑珠¹⁶の如きそなたは涙を流してうすぎぬを濡らす。

王侯の屋敷の門は一たび中に入ってしまうと、海の様にも奥深く、

これからは女を思う私は路頭にさまようばかりだ。

崔郊を妬む者がいて、この詩を長官の宴会の座に書いた。長官は詩を見て、

13 『世説新語』任誕篇第二十三（15節）に伝えられるところでは、阮咸はお婆が自分が思いを寄せていた女中を連れて引っ越しをすると、母の喪中であるのに、喪服のまま驢馬に乗って追いかけて、連れ戻したという。[Ed.]『文淵閣四庫全書』子部 三四一（小説家類）、四十六裏一四十七表＝景印本（臺灣商務印書館，s.d.），1035.173 上一下。『新校搜神記 唐寫本世説新書注 宋本世説新語注』（＝世界文庫 四部刊要）（世界書局，s.d.），459＝『世説新語』（臺北：藝文印書館，1968），459。[Ed.& Tr.] 目加田誠『世説新語』下（＝新釈漢文大系78）（東京：明治書院，1978），920-921。竹田晃『世説新語』下（＝中国の古典22）（東京：学習研究社，1984），211-212，cum 51 (text)。[Tr.]『世説新語 顔氏家訓』（＝中国古典文学大系9）（東京：平凡社，1969），300 [森三樹三郎訳]。

14 『唐詩紀事』四十一萬。

15 冬至後百五（または百三、百六）日に当たる日。火を焚くのを禁じた。

16 元々は晉の石崇の妻の名であったが（『晉書』卷三十三）、のち美女を意味する様になった。

崔郊を召喚させた。周りの者は何が起こるか予想もつかなかった。崔郊はもっぱら憂い悔やむばかりで、考えても逃げ場もなかった。長官は崔郊の姿を見ると、手を握って言った。

「王侯の屋敷の門は一たび中に入ってしまうと、海のように奥深く、これからは女を思う私は路頭にさまようばかりだ」という詩は君が作ったものなのか。四十万金などたいした額ではない。どうして私に手紙一通を書くのを惜しんであらかじめ君の気持ちを告げなかったのだ。」それから女中に命じて一緒に帰らせ、たれぎぬや化粧品箱などをすべてを増やして女中の持参品として持たせた。

~~~~~  
既に述べた様に『唐詩紀事』巻五十六の本文は、上の文章よりも短く、またすべて上記文章中にトレースできるので、『雲谿友議』よりの抜き書きであることが確認される。

当然のことながら、この詩は『全唐詩』にも挙げられている。詩の説明として「雲溪友議云」として短い文を与えているが、『唐詩紀事』の場合とは異なり、単なる抜き書きではない。長官の名前「于公頤」を与えてあったり、女中が寒食の折りに「偶出」て崔郊に出会ったとしている。現行の『雲谿友議』とは別のリセンションがあってそれに基づいたのか、編者が改変したのかのいずれかである。

#### 『御定全唐詩』巻五百五

[Ed.] 『文淵閣四庫全書』集部 三六七 (總集類)、六裏=景印本 (臺灣商務印書館, s.d.), 1428.81上.

『全唐詩』は崔郊の詩としてはこれひとつしか挙げていないので、恐らくは唯一の作品である (松村昂先生の御指摘による)。これを知っていて改作をした『玉すだれ』の著者、またこの漢詩の出所に気付いていた田部氏の漢詩文の素養は相当のものであったと評価されよう。

この漢詩の解釈についてであるが、『玉すだれ』「柳情靈妖」の大筋自体が

崔郊の故事を下敷きにしているので、辻堂兆風は問題の漢詩をそのまま引用しているばかりであるが（読み下しはルビにて与えている）、その意味を『雲谿友議』のコンテクストで現われているものとほぼ同一に理解していたに違いない。一方八雲が与える英語の訳というか、パラフレーズは原詩の意味とは乖離している。漢詩の第三句に対して “But the august lord, having once become enamoured of her — the depth of his longing is like the depth of the sea” とするのは、誤訳というよりは故意の書き換えかもしれないが、それでは愛する女が完全に手の届かない所へ行ってしまったという原詩に籠められている嘆きが完全に捨象されてしまい、不適當である。更にはその解釈では第一句とも意味的に重複してしまう。“Closely, closely the youthful prince now follows after the gem-bright maid” という文の the youthful prince は the august lord のことを言っているからである。すなわち『雲谿友議』では長官、『玉すだれ』では細川政元である。ところが「青柳のはなし」の和訳には、これを友忠であると解したと思われるものがある。奥田訳「若い貴公子が」というのは第三句の「けれども、御主君は」と対比的に用いられているから、友忠であるととられてしまう。平川訳「若き公子は」も「だが上様の」との対比から友忠を意味していると考えざるを得ない。もっとも「後塵」という語が用いられていることより、ただただ後ろから指を加えて見るばかり、といったニュアンスも感じられるから、その場合は主体は友忠であると解したくなる。しかし「公子王孫」という語は身分の上のものを指しているから、友忠とすることはできない。八雲も prince という語を使っているから、細川侯を意図していたことは疑いがない。

広瀬氏は「原話ではこの漢詩が手紙の最後に付け加えられているのに、八雲の物語では漢詩の形で手紙が書かれたと改変されている」（p.95）と指摘しているが、確かに漢詩だけに思いを託して伝えたという方が叙情的である。そして図らずも『雲谿友議』でも贈られたのは漢詩だけである（手紙の形ではなく、直接手渡したのであるが）。八雲の改作によって、再びおおもとの形に戻ったのは興味深い。更に広瀬氏は「恐らく彼は四行書きで二十八文字から成る

漢詩という説明をすれば、七言絶句の意味が読者にわかってもらえると判断したのであろう。だが、外国人に果して漢詩の形態や格調を理解できる者が何人いるのかを想う時、筆者には八雲の苦心が徒労に終わっているように思えてならない」(pp.94-95)と甚だ懐疑的である。これは八雲のせいではなく、訓読をローマ字にする限り漢詩のリズムは伝わらない<sup>17</sup>。

ここで「青柳のはなし」の最初の和訳に触れておこう。『怪談』の和訳は1910年に現われたものが最初のもの様である。すなわち長江高浜謙三訳『怪談』(東京：すみや書店，1910)であるが、筆者はまだ実物を見るには到っていない。速川和男「小泉八雲と怪奇者管見——『怪談』の初訳に触れて——」『小泉八雲の世界』(=笠間選書94)(東京：笠間書院，1978)，117ff.に紹介されているので、以下の記述は専らそれに依るものである。高浜氏は翻訳に当たって『玉すだれ』を参照しなかったようで、畠山義統が畠山吉宗となっていたりで、ローマ字からヤマカンで漢字に復元しているようである。それにしても問題の漢詩は結構なところまでいっていると言ってよかろう。すなわち

公子王孫逐<sub>レ</sub>吾人<sub>一</sub>      縁樹垂<sub>レ</sub>涙滴<sub>一</sub>羅裾<sub>一</sub> (裾の誤りか?)  
衛門一入深如<sub>レ</sub>海      自<sub>レ</sub>是昌郎是路人

とある。むしろ速川氏が改めるべきであるとして掲げている漢詩の方が二句目の最後の語を「羅中」としていることからして、『玉すだれ』が原典であるとは言いながらも実はそれに基づいたのではなく、平井訳をひっぱってきただけであることが想像される。

最後に三十三間堂に関連した柳の精のはなしは、リチャード・ゴードン・スミスによっても英語で再話されていることを付記しておきたい。『日本の昔話と伝説』吉澤貞訳(東京：南雲堂，1993)，26-35 [Richard Gordon Smith, “The Spirit of the Willow Tree,” *Ancient Tales and Folklore of Japan* (London: A.&C. Black, 1908)].

---

17 訓読の弊害は今更説くまでもないことであるが、『プリンス通信』38 (Mar. 1994)，§71; 43-44 (June 1994)，§82; 97 (Dec. 1995)，§166; 98 (Jan. 1996)，§168を参照。

\*) 本稿作成にあたり注記に記した様に、多くの方々から御教示を忝けなくした。

また図書の閲覧に際して、学友江川愛（アイラー）さんに便宜を計って頂いた。これらすべての方に甚深の謝意を表したい。

\*\*) 脱稿後更に『琅邪代醉編』巻二十八、『唐詩類苑』巻一百三十七にもこの漢詩が見られることを知った。

\*\*\*) 染村絢子「『小ノート』の『青柳ものがたり』」「へるん」29 (1992)、91-94という重要な論文を見落としていた。

\*\*\*\*) 以上を含めた応急の補足として、『プリンス通信』170 (Nov.1997)、§297; 第33回日本比較文学会関西大会 (1997.11.15 於大手前女子大学) での配布ハンドアウトを参照されたい。

### XIII. — Hearniana : 「死者の文学」の草稿と印刷本

今日影印本などで知られる小泉八雲の手稿は、印刷に付すために出版社に送付されたいわば最終原稿というよりも、その前段階の下書きというべきものが殆どである。従って同一箇所に対応するものが複数存在することがあり、推敲過程を知る上で貴重な材料を提供している。「死者の文学」については天理図書館に6葉が保存されており、かつその多くが同一箇所を示す重なり合う関係に立つものである。現存草稿と印刷本との対応関係はすでに影印本<sup>1</sup>の编者によってなされているが、その成果に基づきつつ「死者の文学」の草稿を下に示そう。コラムは左から、影印本頁数、草稿オリジナル・ナンバー、天理図書館カタログ・ナンバー、選集版（臨川リプリント）<sup>2</sup>対応頁・行数である。

|    |     |     |                         |
|----|-----|-----|-------------------------|
| 25 | 13  | 2v  | 73.21-74.1              |
| 26 | 129 | 33v | 103.26-104.9            |
| 27 | 130 | 29v | 104.7-14 cum a footnote |
| 28 | 130 | 34v | 104.10-18               |
| 29 | 132 | 32v | 104.19-23               |
| 30 | 132 | 31v | 104.19-22               |

1 Hojin Yano *et al.*, eds., *Lafcadio Hearn Manuscripts* (= *Classica Japonica* 6) (= *Lafcadio Hearn - Mss & Letters - 3*) (Tenri: The Tenri Central Library, 1974; New York: AMS, 1975).

2 See 「小泉八雲「死者の文学」覚え書き」本誌n.4.

以下左欄に草稿、右欄に印刷本の体裁で、両者を対照させた結果を呈示するが、この作業の当面の動機は、八雲自身の日本語のローマ字転写が実は印刷本だけから伺い知れるところよりも、ずっと正確であったことを示すことに主眼がある (cf. 「覚え書き」76.23への注記)。推敲過程に関する議論は、他の多数の資料と合わせて、他日を期したい。

転写にあたっては、次の便法を用いた。自動改行の箇所は追い込みにし、代わりに括弧内の数字で行数を指示した。強制改行の箇所は、転写でも改行してある。その際数字のあとに空白がある場合は、インデントが施されていることを示す。印刷レイアウトのための記号類は忠実に留めた。すなわち、下線並びに、大文字を示す多重線、行間の指示。[ ] は削除、` ` は付加を示す。

#### 影印本25

(1) trimmed into quaintest forms, — (2) their moss-muffled paths, the (3) weird but unquestionable art (4) of their monuments. And (5) [And] no great knowledge of (6) Buddhism is needed to enable (7) you to comprehend, even at (8) a glance, something of the (9) symbolism of those sculptures. (10) You would recognize, for ex-(11)-ample, the shape of the (12) lotus chiselled upon tombs (13) and water-tanks, and would (14) observe that the carving of (15) the pedestals represents a (16) lotus of eight petals, — though (17) you might not be aware that (18) those eight petals symbolize

trimmed into quaintest shapes, the carpetsoftness of their mossed paths, the weird but unquestionable art of their monuments. And no great knowledge of Buddhism is needed to enable you, even at first sight, to understand something of this art. You would recognize the lotus chiseled upon tombs or water-tanks, and would doubtless observe that the designs of the pedestals represent a lotus of eight petals — though you might not know that these eight petals symbolize the Eight Intelligences.

影印本26

- (1) -lute; — by “window-of-Law” must (2) be understood the exercise of (3) that virtue whereby even (4) humanity may attain to some (5) perception of the Infinite. The (6)final word Daishi (“great (7) elder = sister”) has already (8) been explained. (9) Less mystical, but (10) not less beautiful, is the (11) following Nichiren kaimyō, (12) inscribed upon the grave (13) of my dear friend Nishida:—  
(14) # >  
(15) Kō-shin In, Ken-dō Nichi = (16) = ki, Koji.  
(17) 2 lds >

影印本27

- (1) of a samurai:—  
(2) 3lds >  
(3) Kō-shin In, Ken-dō Nichi-ki,  
(4) Koji.  
(5) 2lds >  
(6) [Koji,—  
(7) Bright-Sun-on-the-Way-of-(8)-  
the-Wise, in the Mansion (9) of  
Luminous Mind.] \*  
(10) 3lds >  
(11) On the same stone (12) is carved the kaimyō of (13) the wife: --  
(14) 3lds >

\* The same beautiful kaimyō has been placed

Absolute; — by “Window-of-Law” (Law here signifying the Buddha-state) must be understood that exercise of virtue through which even in this existence some perception of Infinite Truth may be obtained. I have already explained the final word, Daishi (“great elder-sister”).

Less mystical, but not less beautiful, is this Nichiren kaimyō sculptured upon the grave of a young samurai:

Ko-shin In, Ken-dō Nichi-ki, Koji.

of a samurai: --

Ko-shin In, Ken-dō Nichi-ki, Koji.

[Koji—

Bright-Sun-on-the-Way-of-the Wise, in the Mansion of Luminous Mind.]<sup>1</sup>

On the same stone is carven the kaimyō of the wife:

---

1 This beautiful kaimyō is identical with that placed upon the monument of my dear friend Nishida, buried in the Nichiren cemetery of Chōmanji, in Matsue

影印本28

(1) [Bright Sun on the (2) Way of the  
Wise, in (3) the Mansion of Luminous  
(4) Mind.]

(5) 3lds >

(6) On the same stone (7) is carven  
the kaimyō of (8) his young wife:—

(9) 2lds >

(10) Shin-kyō In, Myō-en (11)  
Nichi-ko, Daishi.

(12) 2lds >

(13) [— Wondrous-Spherical-(14)  
Sunbeam, in the Mansion (15) of the  
Mirror of the Heart.]

Bright-Sun-on-the-Way-of-the  
Wise, in the Mansion of Luminous  
Mind.]

On the same stone is carven the  
kaimyō of the wife:

Shin-kyō In, Myō-en Nichi-ko,  
Daishi.

[Daishi—

Spherically-Wondrous-Sunbeam,  
in the Mansion of the Mirror of the  
Heart.]

影印本29

(1) I may now venture (2) upon a t  
(3)

(4) `Perhaps` The reader [who has  
thus far (5) accompanied and, may]  
will now be (6) able to find interest in  
[a typical] the following (7) selection  
[from] of kaimyō [of various (8)  
epochs, ancient and modern]. (9)  
[They were collected and] carefully  
translated (10) for me by Japanese  
friends [, and]. (11) They are of many  
epochs, ancient and modern, and have  
been (12) [are] arranged only [only]  
[in] [according to] by class (13) and  
sex.

Perhaps the reader will now be  
able to find interest in the following  
selection of kaimyō, translated for me  
by Japanese scholars. The inscrip-  
tions are of various rites and epochs;  
but I have arranged them only by  
class and sex:

影印本30

(1) Perhaps the reader (2) will now be able to find (3) interest in the following (4) typical selection of kaimyō, (5) translated for me by var-(6)-ious Japanese friends. (7) They are of many epochs (8) and

Perhaps the reader will now be able to find interest in the following selection of kaimyō, translated for me by Japanese scholars. The inscriptions are of various rites and epochs; but I have arranged them only by class and sex:



## XIV. — Hearniana : 蚊

小泉八雲が蚊について、少なくともふたつのエッセイを書いていることは、既に述べた通りである<sup>1</sup>。そのうちのひとつは極めて有名な『怪談』の末尾に「虫の研究」として他のふたつのエッセイと共に収められているので、いくつも和訳があるが<sup>2</sup>、もうひとつの方はその原文は選集の類いにも収録されなかったもので、和訳は多分ないと思う。本邦初訳であれば、以下に呈示することにも纒な意義が認められよう。英文はティンカーの書に図版の様にして収録されているものに依った<sup>3</sup>。初出が『アイテム』紙の何年何月何日号に掲載されたのか、調査してみたが、わからなかった。西崎一郎氏は相当に詳しいハーンの新開記事のリストを作成しているが<sup>4</sup>、そこにも見出し得なかった。識者の御教示を請う次第である。なお挿絵は軽妙洒脱なイラストレーターであるラフカディオ・ハーンの手になるものであり、その英文のスタイルと合致している。軽い文体の調子を訳文にも移し出すべく努めたが、結果は如何。訳文作成にあたっては、榊井幹生先生の御教示<sup>5</sup>並びに榊井スクールの皆さんの御意見に大いに負っている。記して謝意を表したい。

---

1 『プリンス通信』156号 (July 1997), 619 n.4.

2 See 「小泉八雲「死者の文学」覚え書き」本誌 n.8.

3 Edward Larocque Tinker, *Lafcadio Hearn's American Days* (London: John Lane the Bodley Head Ltd., 1925), 286.

4 西崎一郎「新聞記者としての小泉八雲」『河口真一教授還暦記念論文集 言語・文学・芸術』(東京:山海堂, 1962), 41-64=『現代のエスプリ』91 (1975.2), 23-29.

5 同先生は比較するのに興味深い風刺詩として、D.H.ロレンス「蚊」とジョン・ダン「蚤」を示して下さい。前者については、西成彦「蚊とのつきあい方」『ラフカディオ・ハーン著作集第2巻月報』12 (1988.4), 3-6=『ラフカディオ・ハーンの耳』(=Image Collection 精神史発掘) (東京:岩波, 1993), 135-138をも参照。害虫に託した風刺の系譜を辿ることは誠に興味深いテーマであるが、今の筆者には重荷である。有志の出現を望みたい。

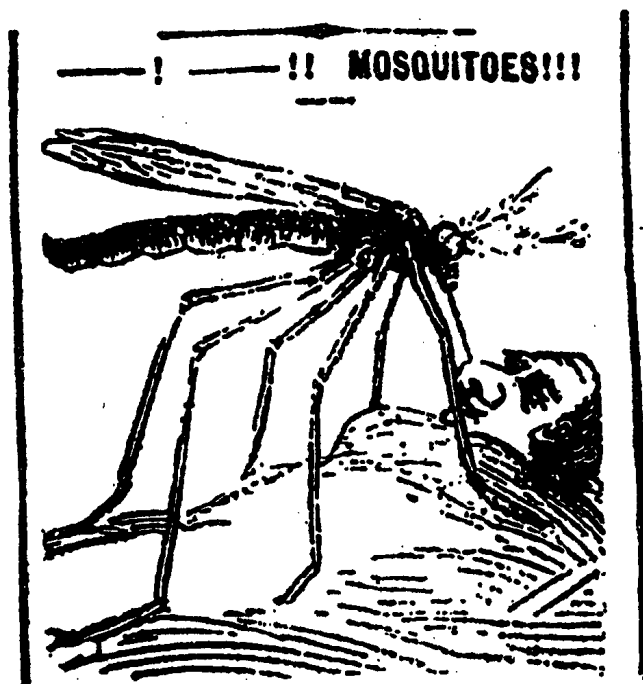
## 蚊

およそ蚊ほど小癩な飛行動物は他にあるまい。日中よりも宵に登場しまして、ホテルの蚊やりの穴はちゃんと心得てござっしゃる。乾燥物の識別にかけては一流で、靴下・ストッキングの質と厚みは遠くにあっても既にお見通し。最新の機械編みの細かい布地とて、そが槍もて突き刺さん。

蚊には御婦人の名を呈しよう。人を悩ますのは雌ばかりであるから。雄は生まれたところを動かずに、慎ましやかで礼儀正しい坊ちゃんである。蚊のかくも巧みに人を苦しめる才は、悪女の深情けにも似ていればこそである。それは夜といわず、昼といわず忍び寄る吸血鬼。

勝利の雄叫びを押し殺しながら鼻っ先などにそっと着地すると、いつものことながら足を一本中空に高く揚げ、遁ずらの用意はゆめゆめ怠らない。だからその足が下がった時こそが、邪悪な存在に終止符を打つ格好の機会である。

人に咬みつく蚊が女の本性を露呈するもうひとつのことがらがある。それは煙草がお嫌いだということ。



しかし女特有の辛抱強さも持ち合わせておいでで、喫煙家がパイプをくゆらしている間、いつまでも待ち続けている。吸い終えたが最後、しっかりと仕返しを頂戴することになる。

とは言うものの、蚊にはそれなりの御利益もある。

もし蚊がこの世からいなくなったら、人はこんな風土の中で恐るしく怠け者になってしまう。ソファーで舟を漕いだり、安楽椅子にひっくり返ったり、しょうもないわさ話しに明け暮れ、益のない夢想に耽ったり、隣人のものを欲しがったり、宝くじが当たらないとほやいたりして、額に汗して動き回って金を稼ぐことをしなくなる。こうして時間を浪費してしまう。怠惰は諸悪の根源なり。蚊は誰よりもそれをよく御存知で、人が怠惰に陥ることを戒めるのに、熱心でいて下さる。

こうした理由から、ほんやりぼっとする夏の日、おんぶんとやって来るのである。とりわけあの静かな夏の一日。互いに交す鶏鳴までもが遠く聞こえてくる程に、すべてが寂静のもとに帰りゆく日。スペイン領アメリカの旧市街で歩哨の応答までもが耳に届いてくる様な。冬には寒いものだから、人は自分で自分を処して輝いているから、蚊殿のお助けなんぞ要らないのである。

蚊の野郎くたばれと思う時にも、贅えてやろうではないか。だって蚊のお陰で人は人生を夢うつつのうちに無為に過ごすことなく、あくせくと動き回り、ひっかき回していることができるのだから。

[追補] チュレイン大学図書館のSylvia Verdun Metzinger さんが、*The Daily City Item* (July 28, 1880) 掲載である旨連絡して下さいました。これはPerkinsの書誌にも洩れており、日本での調査は不能であったので、感謝に堪えない。

## XV. — Hearniana : 小泉八雲オンライン

近年のインターネットの目覚ましい隆盛を見るにつけても、非勤勉、時代遅れ、反動的な筆者としては、これを如何に扱えばよいか戸惑うばかりである。完璧なビブリオグラフィーなんぞあり得ないし、また我々が得る情報はいつも断片的の域を出ることはない。だからその範囲と限界を認識しつつ、従来のツールと同じ様にして使ってゆけばいいのであろうか。『プリンス通信』136-138号 (Feb.1997), §231にても、ハーンの小伝をインターネットからしっかり頂戴していることもあり、このあたりで少しまとめておこう。それ程分量が膨大ではないハーンは、インターネットへの入門の事例としても適当な様である。

WWWの出現で爆発的に広がった膨大な数のサイトの中から如何にし問題のことがらを見つけ出してゆくかということであるが、索引付きのイエローブックの如きものを利用する。紙版もいくつも出ているが、ネット上でもキーワード検索ができる。サーチ・エンジンなどと呼んでいるのだが、次の様なものがある。Yahoo (<http://www.yahoo.com>), Lycos (<http://www.lycos.com>), Excite Netsearch (<http://www.excite.com>), Open Text Index (<http://www/opentext.com:8080>), AltaVista (<http://altavista.digital.com/>), HotBot (<http://www/hotbot.com/>). これらは大体類似なものであるけれど、登録件数、処理速度、複合検索の可能性などなどに若干の違いがあり、用途と目的によって使い分けられる様になるといい。これらを集めて使い分けられる様にしたのが、W3 Search Engines (<http://cuiwww.unige.ch/metaindex.html>). これらを使って、検索項目の欄に“Lafcadio Hearn”と打ち込めば、関係するサイトが示される。そこからあとは適当にクリックしてゆけばいい。

ハーンについてのページは Steve Trussel のものが一番組織的かつ網羅的である ([http://www2.gol.com/users/steve/f\\_hearn.htm](http://www2.gol.com/users/steve/f_hearn.htm)). 先の小伝はここから頂戴した<sup>1</sup>。これにビブリオグラフィーが続く (... [steve/hearn/hearn.htm](http://www2.gol.com/users/steve/hearn/hearn.htm)). 編者自身が断わっている様に、列挙された書目から直接記述したのではなく、先行す

る諸リストを照合してまとめたものである。このビブリオは5部から成っている。すなわち「書題索引」(... [hearn/title.htm](#))「著者名索引」(... [hearn/names.htm](#))「ハーンによる書」(... [hearn/byhearn.htm](#))「ハーンについての書」(... [hearn/onhearn.htm](#))「書誌」(... [hearn/biblio.htm](#))である。単に著者名、タイトル、出版地／社、年代だけではなく、書誌の該当箇所その他の記述を伴っていて、至便である。惜しむらくは日本語のものが含まれていないことである。ハーンは（殆ど）その著作を英語でものした文人であるが<sup>2</sup>、ことハーンに関する限り日本語の文献をも視野に入れなければ、研究の概観を得ることはできない。さりながら日本のものまで入れ出したら際限がないし、英語人を予想して発信しているのであれば、日本字は受け手のマシンに備えがなければ意味がないので、致仕方のないところであろうか。ただし「書誌」の部には、日本語の文献を多数含む銭本健二 1991 横山純子 1992 を挙げるべきであった。もうひとつ欲を言えば、「書題索引」は単行本のタイトルだけが扱われているが、ハーンの手紙は概して小品の集成であることが多い。従って各小品がそれだけで独立に言及され論じられることが多いので、小品の題名で引ける索引であったならば、更に利用の価値は増したかと思われる。

「ハーンによる書」の部は秀逸である。この形式では従来 Blanck 1963 が用いられていたが、それに取って替わるものと言ってよい。これを基に、更なるリプリント、抜粋本、ひいては翻訳をも付加してゆけば、完全なる〈ハーン著作目録〉に近づいてゆくことになるだろう。

以下は簡単な紹介にとどめる。

ルイジアナ大学のハーン・ページ (<http://www.lacollege.edu/classes/en446/profile/hearn/hearn.htm/>)で、これは「伝記」(... [hearn/bio.html](#))「著作」(... [hearn/works.html](#))「批評」(... [hearn/criticism.html](#))「チタの分析」(... [hearn/analysis.html](#))の4部からなる。「伝記」はTrusselのものより幾分か詳しく、「著作」「批評」

- 
- 1 発信者であるTrusselさんとたびたびの交信のうちに、細かい誤りは伝えて差し上げたので訂正され、更には小伝の拙訳も併載され、バイリンガル・サイトとなった。
  - 2 様々な文学叢書を出版しているトゥエイン社は、『ラフカディオ・ハーン』をアメリカ作家シリーズの中にいれている。

は全く役に立たないものであるが、「チタの分析」は Joy Hebert による小論文であり、興味深い。

富山大学はその図書館に〈ヘルン文庫〉を擁するところである。同様のページを開いている (<http://www.toyama-u.ac.jp/tya/library/harn.html>)。当然のことながらここで紹介される「生い立ち」は日本の部分が詳しい。ただその中の一文「ハーンがなぜ東京帝大を辞めたかはっきりしない」というのは、この問題を論じたいくつかの研究を意図的に無視した発言である。同じ国立大学の立場上、お上に都合の悪いことは頬被りしているのではないかと<sup>3</sup>、邪推している。

「「ハーン」なのになぜ「ヘルン」と呼ばれているか？」これにも既にいくつか考証がある。ギリシア語では  $X \acute{\epsilon} \rho \nu$  と綴られている事実をも付け加えておきたい。

富山大学のヘルン文庫の由来、及びその開設に尽力した馬場はる子、南日恒太郎についての簡単な記事も添えられている。

チュレイン大学のページ (<http://www.tulane.edu/~lmiller/Hearn.htm>) はツアーのことしか出ておらず、期待外れであった<sup>4</sup>。

Steve Brown (<http://www.wolfe.net/%7Eesfbrown/Koizumi.html>) と Eric Eldred (<http://www.tiac.net/users/eldred/lh/hearn.html>) のページは、電子テキスト (v. infra) 以外には見るべきものはない。

小泉八雲記念館のページ ([http://www.park.or.jp/Edutainment/Cr02/D29/index\\_e.html](http://www.park.or.jp/Edutainment/Cr02/D29/index_e.html)) は、写真を見るだけでも懐かしい旅情をそそられる。「伝記」 ([http://www.park.or.jp/Edutainment/Cr02/D29/syouga\\_e.html](http://www.park.or.jp/Edutainment/Cr02/D29/syouga_e.html)) 「著作」 ([http://www.park.or.jp/Edutainment/Cr02/D29/cyosyo\\_e.html](http://www.park.or.jp/Edutainment/Cr02/D29/cyosyo_e.html)) 「所蔵品」 ([http://www.park.or.jp/Edutainment/Cr02/D29/syuuzo\\_e.html](http://www.park.or.jp/Edutainment/Cr02/D29/syuuzo_e.html)) 「概況」 ([http://www.park.or.jp/Edutainment/Cr02/D29/info\\_e.html](http://www.park.or.jp/Edutainment/Cr02/D29/info_e.html)) 「松江観光地図」 (<http://www.park.or.jp/Edutain->

3 日本国家がハーンに対して忘恩的態度を取ったことは、研究者たちによっても確認されている。松村1996の書目中にもこれをテーマとした論文はいくつも見いだされる。

4 このツアーのことは『読売新聞』によっても報道されたらしいが、その記事を再編集したものが次に見られる：*Newsouth Japanese Magazine* (Fall 1996), 15. 同書を送付下されたチュレイン大学図書館のSylvia Metzingerさんに感謝申し上げる。

ment/Cr02/D29/IMG/map.gif)と区分されているが、「著作」はルイジアナ大学のそれと同じく簡単なものである。「伝記」の文章は全同ではないが、Trusselのものに極めて近い。文部省の役人をofficialsと複数にする点、島根県知事の名についてKagotedaと誤記をしている点などは共通している<sup>5</sup>。

松江に関するページには八雲ゆかりの地、並びに八雲の作品の舞台となったところについての記事が見い出される。サイトによっては英語版と日本語版の両方がある。まずは上に挙げたのとほぼ同様の「地図」と「概況」(<http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/e/e.htm>... [kankou/j/j.htm](http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/j/j.htm))がある。そこから「小泉八雲旧居」(<http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/e/yakumoky.htm>... [kankou/j/yakumo.htm](http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/j/yakumo.htm) [記念館をも含む])「武家屋敷」(<http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/e/buke.htm>... [kankou/j/buke.htm](http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/j/buke.htm))「月照寺」(<http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/e/gesshoji.htm>... [kankou/j/gessyoji.htm](http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/j/gessyoji.htm))「月照寺の詳細」(<http://www.web-sanin.co.jp/insti/geshouji/>)「観月庵／普門院」(<http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/j/fumonin.htm>)「八重垣神社」(<http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/e/yaegaki.htm>... [kankou/j/yaegaki.htm](http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kankou/j/yaegaki.htm))等々が引き出される。

八雲が度々訪れた焼津でもそのページにてハーンに言及している(<http://www.tokai.or.jp/yaizu-city/suisan/p4.htm#YAKUMO>)。纒か数行のもので得るところはないが、同市がハーンを強く意識している証左となるものである<sup>6</sup>。

書店のカタログにもビブリオグラフィーに匹敵するようなものもある。しかも値段までついているところは、書誌には絶対に期待できない情報である。Trusselが書誌を編むにあたって利用したものを列挙しているが、その中のひとつにJerrold G. Stanoffのカタログがある。Trusselのサイトからリンクしているが、そこからではハーンの本目録は引き出せない。しかし電子メールでjgs@rareorientbooks.comに依頼すると送信してもらえる。1997.2.24のものでは、274のアイテムが挙がっていた。もうひとつメンションすべきは、French Quarter Galleriaである。ここのカタログは組織的で、ハーンの本目録、論説・物語、関連資料という具合に項目別にわけてあり、またそれぞれの中で、年代別に下位区分されている。<http://www.fqmall.com/hearn/index.html>が目次であり、そこから各項目へと入ることができる。

こうしたサイトから得られる重要なリソースとして、電子テキストは逸することができない。見かけは紙に印刷されていたテキストを打ち込んだものに過ぎないが、索引を作ったりとか、文体研究をしたりとか、用語検索をする場合とかに、その便宜には計り知れないものがある。電子テキストの御利益の詳細は多々説かれることであるから、ここでは省略する<sup>7</sup>。以下に作品別にリストしておこう。

『シルヴェストル・ボナールの罪』

[http://www.berkeleynetcentral.com/Dr\\_Pseudocryptonym/France\\_The\\_Crime\\_of\\_SylvestreBonnard.html](http://www.berkeleynetcentral.com/Dr_Pseudocryptonym/France_The_Crime_of_SylvestreBonnard.html)

『心』

「停車場にて」 <http://www.wolfe.net/%7Eesfbrown/Railway.html>

『異国情趣と回顧』

「富士の山」 <http://www.tiac.net/users/eldred/lh/fuji.html>

『骨董』

「草ひばり」 <http://www.wolfe.net/%7Eesfbrown/Kusa-Hibari.html>

『怪談』

「耳なし芳一」 <http://www.tiac.net/users/eldred/lh/mimi.html>

「おしどり」 <http://www.tiac.net/users/eldred/lh/oshi.html>

「乳母桜」 <http://www.wolfe.net/%7Eesfbrown/Ubazakura.html>

「策略」 <http://www.tiac.net/users/eldred/lh/diplo.html>

「雪女」 <http://www2.gol.com/users/steve/hearn/yuki.htm>

---

5 Trusselの新版では、これらは筆者の提言に基づき訂正されている。

6 本年8月に小泉八雲来焼百周年記念事業が開催されたことは、記憶に新しい (cf. 『毎日新聞』夕刊 1997.8.12, p.6)。列席できなかった筆者のために、同事業の資料を送り下された横山純子先生に感謝申し上げたい。

7 例えば、佐藤勝「研究分野に応じた電子版コーパス作成」『英語青年』142-2 [1767] (1996. 5), 64(12)-66(14), 52(104); 鈴木英夫「個人研究者による電子テキスト処理をめぐって」上下 同142-2 [1767] (1996. 5), 61(9)-63(11); 142-3 [1768] (1996. 6), 156(48)-158(50) 石木利明「英米文学研究のためのインターネット」同142-10 [1775] (1997. 1), 565(45)-570(50) などなど。



[前前号への補足]

AA VI 本誌 15 (1995), 12-16 にて小泉八雲と神戸のかかわりについて筆が及んだのであるが、当時このテーマに関わる文献がどのくらいあるのかよくわからなかった。その後管見に入ったものを列挙しておく。

島谷照夫「小泉八雲研究——神戸時代——」『論叢』（關西學院短期大學商科）1 (1950.6), 89-100.

Marcel Robert, “chapitre III: Kobé,” *Lafcadio Hearn*, tome II Asie, première partie (= Publications de la Maison Franco-Japonaise série B, tome IV) (Tokyo: Hokuseido Press, 1951), 95-117.

川村秀秋「小泉八雲と神戸」『柴のいほり』7 (1972), 35-38.

川谷恂郎「ラフカディオ・ハーンと神戸——書簡と作品『心』を中心にして——」『歴史と神戸』16-3 [81] (1977.1)[特集・神戸の歴史・大正編1], 27-31.

前田義通「小泉八雲ノート——神戸時代、その問題点——」『北九州大学文学部紀要』開学30周年記念号 (1977), 137-155.

宮崎修二郎「ラフカディオ・ハーン「門つけ」」『ひょうご文学歳時記』（神戸：神戸新聞出版センター，1978），229-231.

椎名駿輔「八雲と神戸クロニクル」『へるん』22 (1985), 13-14.

藤森きぬえ「神戸とヘルンと私」『へるん』23 (1986), 41-42.

榊井幹生「はらからのほとけ」『へるん』26 (1989), 34-36.

椎名駿輔「ハーンと神戸——「門つけ」を読んで」『へるん』28 (1991), 68-70.

Paul Murray, “Chapter Nine: Kobe,” *A Fantastic Journey: The Life and Literature of LH* (Folkestone: Japan Library, 1993), 179-195, 339-340.

高木大幹「ハーンと教育：神戸時代」『英語教育』43-7 (1994.9 増刊号), 102-103.

中園岩男「神戸のヘルン居住地探索」『へるん』33 (1996), 34-37.

中園さんの論文は地勢図を御専門の分野の観点から見直すといった全く新しい視点を導入したものである。これだけで完結しているのではなく、『へるん』誌の次号にも続きが載せられるとのこと。しかし中園さんの研究結果は、1997年1月26日にサンテレビで放映された「すてきに神戸：神戸文学散歩：小泉八雲と谷崎潤一郎」の中で既に紹介されている。筆者も個人的に中園さん御自身から地勢図と写真を頂いているので、中園説の結論は熟知しているのだが、やはり『へるん』誌の次号にきちんと文字化されたものが現われるのが鶴首される。[その後出版された。中園岩男「神戸のヘルン居住地探索」(二)『へるん』34 (1997), 11-14]

ニュー・オーリンズ博覧会とハーンについて扱ったものとして、更に次の論文がある：小玉晃一「ニュー・オーリンズ博覧会とハーン」『英語青年』111-12 [1402] (1965.12), 801 [13]; 萩原順子「ニューオーリンズの博覧会——ハーンと日本との出会い」『へるん』26 (1989), 52-54.

八雲と大谷が訪れた時代の神戸大仏<sup>1</sup>の写真は次の書にも見つけられた：『写真集 むかしの神戸 明治・大正・昭和をつづる』（神戸：のじぎく文庫，1974），40；『わが家のアルバム百年史 むかしの兵庫 明治編』（神戸：神戸新聞出版センター，1976），87；榊井前掲論文35；『新修神戸市史』歴史編Ⅳ 近代・現代（神戸：神戸市，1994），40 [アーサー・

トムセン蔵]

御自身がジャーナリストでもあった真貝義五郎教授（松蔭女学院大）は、上のテレビ番組並びに1997年8月21日の講演「科学者ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）」で、八雲が新聞の論説記者であった神戸時代を積極的に評価しようという提言をされている（後者の講演会は筆者欠席。配布資料並びに当日出席された原田米蔵先生の談より内容を推定した）。列挙した諸研究の再読をも含めて、従来等閑視されがちであった八雲の神戸期を再考する意義は大きい。

- 
- 1 能福寺（天台宗）（神戸市兵庫区北逆瀬川町55 住職：雲井弘善師）については、『全国寺院名鑑』近畿篇〈改訂版〉（東京：同刊行会，1975），236を参照。なお神戸大仏と博多大仏（これも八雲にゆかりがある）の関係については、既に榊井論文の説くところであるが、この夏博多馬出（まいだし）の称名寺を訪問した成果を基に若干の追加を別稿においてする予定である。